



Data

監督・脚本：野尻克己

出演：岸部一徳／原日出子／木竜麻生／加瀬亮／岸本加世子／大森南朋／吉本菜穂子／宇野祥平／山岸門人／川面千晶／島田桃依／金子岳憲／レベッカ・ヤマダ／政岡泰志

■■■ショートコメント■■■

◆本作は新聞の映画批評では、かなり好評。11月9日付朝日新聞夕刊は母親役で出演した原日出子を大きく取り上げていたし、11月15日付日経新聞夕刊の「文化往来」では「新人・野尻克己監督、渾身の家族劇」の見出しで絶賛していた。そこで、“こりゃ必見！”と思って映画館へ行ったが・・・。

◆冒頭、鈴木家の長男・浩一（加瀬亮）がいきなり首つり自殺をするシーンが登場する。これは、本作が監督デビュー作となる野尻克己のかなり思い切った演出だ。しかし、二階の浩一の部屋でそれを発見した母親の悠子（原日出子）が、一階に包丁を取りに行ったのは一体なぜ？

それ以降は、死の淵から奇跡的に戻ってきたにもかかわらず、記憶を失ってしまった悠子に対して、鈴木家の家長・幸男（岸部一徳）、自殺した浩一の妹の富美（木竜麻生）、そして悠子の弟の博（大森南朋）が「浩一はアルゼンチンで働いている」という「嘘」をつき通すという物語になる。それは一見『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）（『シネマ1』50頁）でみた“高貴な嘘”と同じように、必要不可欠な“鈴木家の嘘”だと思って期待したが、さて……。私には『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』の出来とは雲泥の差だ。これでは……。

◆浩一が自殺したのは、なぜ？それは“人生がつかなくなったため”らしい。そんな自殺の動機はともかく、冒頭で提示される「自殺」というテーマはいかにも重い。そして、前述の日経新聞によると、野尻自身も兄を亡くした体験があるらしい。しかして、本作は悲劇調になったり、喜劇調になったりしながら、“鈴木家の嘘”をテーマに物語が展開していくが、残念ながら私の目には途中からバカバカしく……。

◆本作に見るソーブランドの物語は一体ナニ？また、ラストの霊媒師の物語は一体ナニ？途中で迫真の演技を見せる富美の悲しみや、浩一がアルゼンチンにはおらず、死亡したことを知らされた悠子の悲しみは十分伝わってくる。しかし、残念ながら私は全然それに共感できなかった。また、富美は「生きてる意味がないのなら死ねば！」とお兄ちゃんに言ったことをしきりに後悔し、自分も一度は川の中に入ろうとしたが、それも私の目にはナンセンス。むしろ、悠子が言った言葉のほうが正しいのでは？私にはそう思ってしまうが・・・。

◆まあ、今ドキ1人の若者の自殺という重いテーマを映画にすれば、いかにもとってつけたような本作のような脚本になるのは仕方ないのかもしれない。しかし、『鈴木家の嘘』と『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』との映画としてのレベルの差は私には歴然だ。

2018（平成30）年11月28日記